

□□□-□□□□

CODE Letter
2014. 7. 4 Vol.50

(特活)CODE 海外災害援助市民センター 発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10
TEL: 078-578-7744, FAX: 078-574-0702
Email: info@code-jp.org
URL: http://www.code-jp.org/
郵便振替: 00930-0-330579

今月の内容

巻頭言「2014 年度基本方針」
2013 年度事業報告・2014 年度事業計画
特集: アフガニスタンぶどうプロジェクト
TOPICS: 月イチ★シリーズ「食と国際協力」
イベント: CODE 寺子屋
ハイチからの祈り
～シスター須藤昭子さん講演と対談
プロジェクト展開: アフガニスタン地滑り
会員・寄付者紹介
会員募集・寄付のお願い
役員・スタッフ活動記録

2014 年度 CODE 基本方針

「震災 20 年目に入り・・・ 寄り添いからつながり、新たな芽吹きへ」

阪神・淡路大震災から 20 年目の道はすでに始まっている。

CODE はこの 20 年で世界 33 の国と地域へ 53 回の救援活動を行ってきた。足跡を振り返ってみると、これまでアジアや中南米を中心に生業、耐震、子ども、女性、農業、漁業、防災「共育」、伝統文化などの支援活動を微力ながら実践してきた。その実践の中から被災者主体、保護とエンパワーメント、地域経済の自立、国を超えた支え合い、自然との共生などを被災地の人たちと共に学び合ってきた。

CODE の支援が、各地域では新たな展開を迎えている。11 年目に入ったアフガニスタンでは、日本でのレーズン販売を機に、これまでの支援からともに平和構築へ向かうパートナーになりつつあり、中国・四川では老年活動センターを使った農家楽の運営は少しずつ軌道に乗り始めている。また、フィリピンでは、これまでの 20 年の蓄積があったからこそ現地の NGO や市民社会のあり様から多くを学ぶことができた。海外の被災地では、災害を機に新たな芽吹きが始まりつつある。CODE は「最後のひとりまで」を理念に掲げ、それぞれの被災地で一人ひとりの被災者に寄り添ってきた。支援活動の中で支援者は被災地から多くの事を学び、被災者は自立への道を歩みつつ、次の被災地への支援者となっていく。被災地での一つひとつの寄り添いが、多様なつながりを生み出してきた。

東日本大震災では、世界 174 カ国から支援を頂き、これまで CODE が支援してきた国々からも義捐金やメッセージが多数寄せられた。KOBE から始まった「困った時はお互い様」は、今や世界で共有される言葉になった。

また、多くの若者が東日本大震災を機にボランティアや NGO にかかわるようになり、少しずつではあるが、海外へと目を向ける若者も増えている。国を超えた支え合いの文化は確実に広がりを見せ、今後、来る巨大災害に備えた海外との市民のネットワークをしっかりと築いていかなくてはならない。

震災から 20 年、国内外で多くの災害が発生し、災害救援文化は広がりを見せつつあるが、社会全体で NGO やボランティアを支える状況にはなく、中でも寄付文化は成熟しているとは言いがたい。だからこそ CODE は、CODE・AID という枠組みで「社会の一人ひとりが支える市民活動」を目指して、これまで以上に海外からの学びを国内にも発信し、さまざまな方法で寄付をあらためて呼びかける。それによって次世代を担う若者を育て、同時に NGO の自力もしっかりとつけていく。

CODE は災害救援活動を通じて、被災地域の抱えている現実の困難な課題と向き合い、一人ひとりの生き方をあらためて社会に問い直していく。この覚悟を、震災 20 年の基本方針としたい。

（事務局長　吉椿雅道）

2014年度CODE総会を開催しました

6月14日（土）の17時15分からCODE海外災害援助市民センターの2014年度総会を開催しました。

正会員23名（うち委任状13名）、オブザーバー1名にご参加いただき、議案である2013年度事業報告・決算、2014年度事業計画・予算・基本方針について審議され、承認されました。主な報告と計画、基本方針に関しては本誌に掲載しておりますのでご覧ください。今後ともみなさまのご支援・ご協力のほどよろしくお願い致します。（事務局長　吉椿雅道）

2013年度事業報告と2014年度事業計画

◎被災地救援事業

1. アフガニスタン救援プロジェクト（ぶどう畑再生支援事業）

【2013年度報告】

紛争と干ばつによった荒廃したアフガニスタンの大地を甦らせようと始まった「ぶどうプロジェクト」も11年目に入りました。2003年の開始当初288世帯のぶどう農家への融資から始まりました。2007年から3年間、JICA草の根技術協力事業（地域提案型）日本での農業研修も行い、2013年6月の時点で537世帯にまで増加しました。ところが、2010年より主な市場であるパキスタンへの輸出が禁止されたことでぶどうの販路を失ってしまいました。そこでCODEとしては、アフガニスタンの人たちと共に新たな販路を模索する同時に、日本にレーズンとして輸入し、アフガニスタンの現状を知ってもらう機会にしています。これまでにミールバチャコット産の有機レーズンを40kg輸入し、日本フェアトレード委員会やボランティアさんのご協力でデザイン、パッキングを行い、試験的に販売してきました。

【2014年度計画】

「れーずんの会」を開催し、レーズンを食べながらアフガニスタンの事を知ってもらう機会を定期的に作っていきます。また、今後も継続的にレーズンを輸入し、本格的な販売に向けて体制を整えていきます。すでに100g、550円で販売しています。ぜひお買い求めください。

2. 中国・四川省地震救援プロジェクト

【2013年度報告】

2008年に発生した四川での大地震からすでに6年が経ちました。北川県光明村を中心に、これまでに日本人を中心とした約100名のボランティアによるガレキの片づけ、仮設住宅支援などを行い、住民との関係性を築いてきました。2011年の東日本大震災では光明村を中心に四川から沢山のメッセージや義捐金が寄せられました。メインプロジェクトである「光明村老年活動センター」も2011年に完成し、高齢者や女性、子どもの集う場となっています。また、センターを活用した「農家楽」（アグリツーリズム）の経営も行われています。2013年度には北京より農家楽の専門家をお呼びし、ワークショップを開催しました。これにより住民参加型の農家楽の経営が見込まれます。

【2014年度計画】

今後、光明村では、農家楽の運営に住民が参加しやすくするために合作社（協同組合）を設立する計画です。CODEは引き続き光明村の動きを見守っていきます。また、四川大地震のあった2008年は、中国のボランティア元年とも市民社会元年とも言われています。

日中関係の冷え込む今だからこそ、今後の災害に向けて日中の民と民の関係を深めるために日本と中国のNGOやボランティアを担う若者の交流・研修を行いたいと思います。

3. ハイチ地震救援プロジェクト

【2013 年度報告】

2010 年の大地震から 3 年半が過ぎた今も約 14 万 6000 人が 300 か所の避難キャンプのテントで暮らしています。CODE は震災直後からメキシコのクワテモック氏を派遣し、移動診療所や孤児院の支援を行ってきました。また、現地の NGO の拠点整備や女性向けのマイクロファイナンス支援も行ってきました。そして農業の再生がハイチの未来を左右する事から 2012 年からはハイチに 37 年間滞在していたシスター須藤昭子さん（クリスト・ロア宣教修道女会）と現地の NGO「GEDDH」と共に農業技術学校の建設を支援する事が決定しました。2013 年 7 月には現地の関係者や CODE で顧問会を設立し、学校の建設が始まりました。その後、土地契約の問題で建設工事が一時中断しましたが、その後の協議によって再度契約、合意されました。

【2014 年度計画】

学校の建設がまもなく再開され、9 月には農業技術学校が開校する予定です。2 年制の学校を運営していくための当面のサポートが必要になります。CODE は顧問会と共に今後の運営資金についても支援していきたいと思います。また、9 月 23 日にはシスター須藤を神戸にお招きし、講演と対談も行います。引き続きご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

4. 中国・青海省地震救援プロジェクト

【2013 年度報告】

2010 年の青海省のチベット高原を襲った大地震。CODE は 3 度スタッフを現地に派遣し、調査を行ってきました。現地の NGO へのヒアリングや調査によってチベット独特の家畜、ヤクがチベット人にとって非常に重要な事が分かりました。CODE は、インドネシア人のイアニさんと連携して、称多県拉布地域（LAB）で「ヤク銀行」プロジェクトを実施する事を決定しました。現地の住民、僧侶、獣医、遊牧民からなる「ヤク銀行委員会」を設立し、2013 年夏にはヤクを貧しい遊牧民に優先的にヤクを提供しました。

【2014 年度計画】

すでに遊牧民に提供されたヤクですが、現地の厳寒の気候や病気によって死亡したヤクも数頭出ていますが、多くは少しずつ成長しています。8 月には現地のモニタリングを行い、ヤクの生育状況や遊牧民の生活状況を見守っていきます。

5. インドネシア・ジャワ中部地震救援プロジェクト

【2013 年度報告】

2006 年の地震後には現地に建築家エコ・プロワットさんのご協力でヤシの木を使った伝統スタイルの住宅を再建しました。その後、干ばつの地域で「呼び水プロジェクト」と称して集落へ水道管を敷く支援を行ってきました。2010 年より毎年、神戸学院大学の浅野壽夫教授の海外研修に CODE のスタッフも同行させていただく形で状況把握に努めています。

【2014 年度計画】

今年度もカウンターパートを通じて、新たな動きがあり次第、随時対応していきます。また、今後も神戸学院大学の研修を通じて情報収集を行ってきます。

6. 東日本大地震救援プロジェクト

【2013 年度報告】

2011 年の震災直後に CODE スタッフを半年間、被災地 NGO 協働センターに出向させ、被災地支援を行いました。2011 年度は中国・四川から、2012 年度はアフガニスタン、四川、ハイチからカウンターパートをお呼びして東日本大震災の被災者との交流を行いました。2013 年 11 月のフィリピン台風が沿岸部を襲い、東北との共通の課題も見えてきました。今後も東北と海外をつなぐ「支え合い・学び合い」の交流を継続していきます。

【2014 年度計画】

東日本大震災の被災地の状況を海外にも発信するために英語での発信も充実させてきます。
フィリピン台風災害の被災地から漁民や NGO の方を招へいし、東北の被災地の漁村の方々との交流を行うなど「つなぐ」役割を担ってきます。

7. メキシコ暴風雨救援プロジェクト

【2013 年度報告】

2013 年 9 月に同時発生したハリケーンと熱帯低気圧によってメキシコの 2 が被災したと言われています。CODE は、メキシコのクワテモックさんを派遣し、現地の若者のグループと共に山間部の支援の少ない地域で食糧や衣類などの配布を行いました。また日本人旅行者の花田さんにも情報提供という形でご協力を頂きました。

【2014 年度計画】

現在、クワテモックさん活動を継続しており、山間部の被災地で被災者へのワークショップや子供への寄り添い支援を計画しています。CODE も彼の活動をサポートしていきます。

8. フィリピン台風 Haiyan 救援プロジェクト （新規）

【2013 年度報告】
2013 年 11 月に発生した史上最大級の台風 Haiyan はフィリピン中部を通過し、レイテ島、サマール島、セブ島などの多くの島に高潮と強風の被害をもたらしました。CODE は 1 週間後にスタッフ 2 名をセブ島、パナイ島に派遣し、調査と少量の物資を配布しました。その後、二度のスタッフ派遣でセブ島の NGO ネットワーク（ABAG）を通じてボートや漁網を提供する漁業支援プロジェクトを決定しました。現地の NGO のあり方や女性パワーからたくさんの事を学ばさせていただきました。

【2014 年度計画】
現在、セブの NGO ネットワークと被災地の 6 つの住民組織がボート提供数や共有方法などを協議しており、それが決定次第、ボートを購入し、提供していきます。また、セブの被災漁民や NGO の方を日本に招聘し、東北の被災漁村の方との交流も予定しています。

9. アフガニスタン地滑り救援プロジェクト（新規）

【2014 年度の報告と計画】
2014 年 5 月にアフガニスタン北東部で発生した大規模な地滑りによって 503 名の尊い命を奪われました。また 4 月末から北部の 14 州で大雨による洪水が多発しています。カウンターパートのラフマンさん達が、避難キャンプでの生活支援として調理道具を配布しています。CODE もラフマンさんを通じて調理道具を支援する寄付を呼びかけました。今後もラフマンさん達の動きをサポートしていきます。引き続きご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

◎人材育成事業

1. 寺子屋セミナー

「2013 年度の報告」
2012 年度から 2013 年度まで約 1 年半をかけて、「CODE 寺子屋若者編～今、若者に伝える、17 年間の救援思想」と題して全 12 回、村井雅清 CODE 理事（前事務局長）にこれまでの救援プロジェクトについて語っていただきました。新しいスタッフやボランティアの若い方々が「CODE らしさ」を学ぶ機会となりました。

【2014 年度の計画】
今年度も新しいスタッフやボランティア向けに村井理事による寺子屋を全 3 回開催しています。その後、引き続き室崎益輝 CODE 副代表理事による CODE 寺子屋を全 4 回で開催いたします。

2. 月イチシリーズ「食と国際協力」

2014 年 3 月より開催している「れーずんの会」から派生した企画です。災害が起きる前から「食」を通じて気軽にその国の事を知る事で災害時に CODE の活動にかかわっていただけるような機会として毎月第 3 木曜に開催しています。この企画によって普段お会いする事のない方々にもご参加いただいています。是非ご参加ください。

今後の予定

回	内容	食事	語り手
5	知らない国の人と友達になろう（アメリカ、メキシコ）	おにぎりホットドッグ	米、メキシコの高校生 CODE（多田）
6	チベット高原から（中国・青海省）	ヤク（牛）ジャーキー	CODE（吉椿）
7	ハイチからの祈り	バナナチップチキン	クリストロア修道女会（シスター須藤さん）
8	れーずんの会（アフガニスタン）	有機レーズン	CODE
9	イランってどんな国？	イラン料理	在日イラン人夫妻
10	四川省の風土と食	麻婆豆腐	CODE（吉椿）

◎ネットワーク構築事業

神戸学院大学、関西 NGO 協議会、コープこうべなどからの依頼で講師派遣を引き続き行っています。そのほかにもこれまで通り JPF や JANIC、JICA などとも連携を図っていきます。また、昨年度のフィリピン台風災害の際には、日本国内で「ワカモノヂカラ」、「BORO フェスタ」、「RUMS　Club」、「志縁」、「神戸市外国語大学」などの新たな団体・グループの方々からご支援を頂きました。海外では、フィリピンの NGO ネットワーク ABAG や中国の NGO ネットワーク、5.12 民間救助服務センター、インドネシアの若者グループ BDSG などとの関係を促進させていきます。

◎救援プロジェクト報告会及び講師派遣

2013年度は、CODE主催でフィリピン台風、チリ地震・津波（2010）の報告会を計3回行った。また、神戸大学、神戸学院大学、追手門大学、帝塚山学院大学、兵庫県立大学、関西学院大学、北陸学院大学、龍谷大学、舞子高校、楠高校などの大学、高校の講義へ講師を派遣した。その他、MBS毎日放送、ラジオ関西、文化放送、FMわいわいなどのラジオ出演、明石あかねが丘学園などの講演への講師派遣も行った。
2014年度も神戸学院大学、神戸大学、JICA関西、地域コープ委員会、日本災害看護学会、帝塚山学院大学、明石あかねが丘学園、龍谷大学、楠高校、NPOワールドユース・ジャパンなどから講師派遣の依頼が来ている。このように講演・講義への講師派遣の依頼も増加しつつあり、これを通じて各方面への関係性の構築と広報に今後も力を入れていく。

◎機関誌、インターネットによる情報の発信

CODEは、被災地のレポートやイベント、海外の災害などの情報をHPやメーリングリスト、フェイスブックなどで発信しています。また、年3回発行のCODEレターでは、進行中のプロジェクトの状況やイベント情報、寄付者のお名前、スタッフの活動などを掲載しています。また、昨年度より「災害を忘れない」シリーズで過去の災害についての教訓なども発信しています。

◎その他の事業

1.CODE AID

CODEは災害発生時に皆様から寄せられる寄付金の一部を事務・管理費として使わさせいただいております。CODE活動をより発展させていくためには、平時からCODEの活動を支える仕組み作りが必要となってきます。それがCODE AIDです。CODE AIDに託された寄付金は災害時の初動対応として、次世代を担う若者の育成として活用されます。現在、代表理事を筆頭に体制作りを進めております。

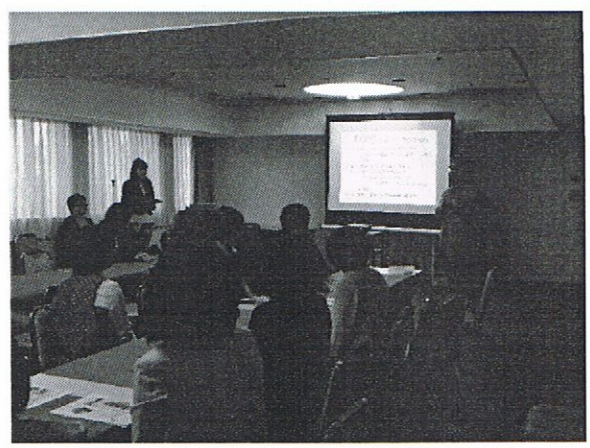
2. 阪神・淡路大震災20周年関連事業（新規）

2014年度はすでに震災から20年目に入っています。被災地KOBEでは、様々なイベントが企画されていますが、CODEは理事参加をしていただいているコープこうべの主催する企画の一部を担当させていただく予定です。詳細が決まれば再度ご報告させていただきます。

3. 第3回国連防災世界会議（新規）

2005年に神戸で開催された第2回から10年を経て、東日本大震災の被災地、仙台で第3回が開催されます。ポストHFA（兵庫行動枠組み）の評価、検証、今後の防災の動きを把握し、世界におけるCODEの役割を再確認するために参加する予定です。

CODEの夕べを開催しました



6月14日（土）の18時30分よりCODEの夕べを開催しました。毎年総会後に開催されるCODEの夕べは、日ごろよりCODEの活動を支えてくださっている会員やボランティア、寄付者の方々との貴重な交流の場となっています。阪神・淡路大震災から20年間、54回のCODEの活動の振り返る映像や現在CODEが実施している5つの救援プロジェクトの報告、その国の魅力を紹介する映像をご覧いただきました。参加された方々にCODEへの理解をより深めてもらえたのではないかと思います。

CODEの夕べに参加した室﨑副代表はご自身のFacebookにて、「CODEの20年間33カ国53回の救援活動を振り返りましたが、その活動の素晴らしさに感動と称賛を禁じ得ませんでした。多くの人たちに支えられて、ここまで来たのだと感無量です。ところで、「支援者を支援する文化」が日本には残念ながら根付いていません。もっともっと私たちの取り組みを理解していただくように努め、支援の文化を根付かせる努力をして、世界で災害でくりしむ人を一人でも少なくできるよう、頑張らねばと思っています。」と述べています。

特集 アフガニスタンぶどう畑再生プロジェクト

れーずんの販売をはじめました

みなさま、

長年にわたり、この「アフガニスタンぶどう畑再生プロジェクト」に温かいご支援を承り、心からお礼を申し上げます。2001年11月の米英軍の空爆により、激しい戦いの矢面に立たされたアフガニスタンの人たちに、みなさまは希望の光をもたらし、ぶどう農家を支え続けてくださいました。ぶどう農家を勇気づけ、厳しい状況下でも彼らが平和な暮らしを営んでこられたのは、偏に皆さまのご支援の賜物です。

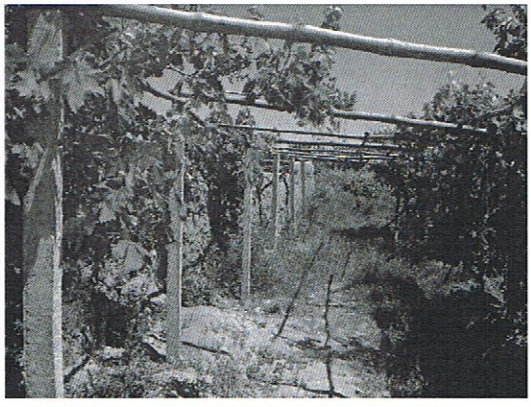
おかげさまでぶどう農家のみなさまは、日本で学んだ無農薬・有機栽培の技術をアフガニスタンの地で活かし、新たな自立の一歩を踏み出しました。こうしてやっと皆さまにご報告できる「証」が、「無添加 れーずん アフガニスタンからの贈り物」です。本来であれば、みなさまに一番にご報告をすべきことですが、初めての試みのためご報告が遅くなりましたことを心よりお詫び申し上げます。

今後、私たちとぶどう農家のみなさまの関係は、紛争被害者と支援者ではなく、生産者と消費者という対等な関係の下、平和な社会を築くパートナーとして共に歩んで下さいますことを切望しております。みなさまにおかれましては、引き続き、この「贈り物」を購入することによって、アフガニスタンを見守り続けてくださることを切に願っております。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。



無添加 れーずん「アフガニスタンからの贈り物」はこのような真空パックになりました。幾度も検討を重ね、管理・衛生上このような形にたどり着きました。今後も勉強、研究を重ねて参りますので、どうぞよろしくお願い致します。

ぶどうがつなぐアフガニスタンとわたしたち
—平和への歩み



日本での研修（JICAと共に行った草の根技術協力事業）後、習った棚式栽培をアフガニスタンで実践している様子

この「無添加 れーずん アフガニスタンからの贈り物」は、現在はネット販売をはじめ事務所からの直接販売で、すでにご賞味いただきましたみなさまからは、ご好評の声を続々といただいております。

「甘くて酸味があって濃い味がたまりません！」や、「掛け値なしておいしい」などのお声。このような感想をいただきまして、私ども一同うれしい思いで胸がいっぱいです。

今後、アフガニスタンの方々がアフガニスタンや隣国パキスタンでぶどうの販路を確保できない状態にある限り、私たちは微力ではありますが、何かできることを行い続けたいと思っております。

アフガニスタンとレーズンの関係

このれーずんを販売するにあたり、私たちはれーずんに関する知識を深めるため、カウンターパートであるラフマンさんと頻繁に連絡を取り合っています。そのラフマンさんにれーずんのことを教えていただきましたので、その様子を一部を少しご紹介したいと思います。

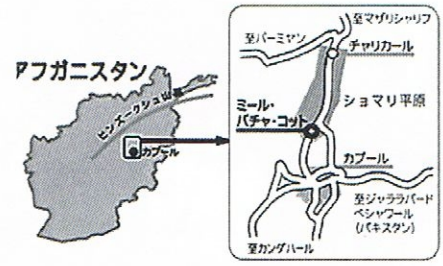
―アフガニスタンではレーズンをよく食べられるそうですね。
―ラフマンさん：そうです。ぶどうをそのまま市場で売ったり、レーズンにしたりして、食べています。収穫期の３ヶ月後（収穫期は概ね９～10月あたり）は、家で天日干しにしたり、影で干したりして、レーズンを作ります。それをパラウ（アフガニスタンでよく食べられているレーズンを入れて作る混ぜご飯）にしてよく食べています。レーズンは、栄養価が高いので、みんな携帯してよくつまんでいます。

アフガニスタンのれーずんの色



↑今までアフガニスタンから送っていただいたレーズンには大きく分けて三種類の色があります。黒（写真左上）、白（同右上）、赤（同下）です。
組合に入っている複数の農家から集めて日本に送られてきますので、種類はさまざま。一つひとつがグミのような弾力をもち、干したままの自然の味です。

―送っていただいているレーズンはどのような種類なのでしょうか。
―ラフマンさん：いろんな種類が混ざっています。というのは、私たちは組合をつくり、そこに入っている農家からぶどうを集め、日本に送っているため、種類はさまざまです。アフガニスタンには、ぶどうの木はたったの100万本しかありません。Shamaly（ショマリ）平原のような場所は、ぶどうの産地で有名ですが、たとえばPeer Nakhshir（ピア ナクシール）やHerat（ヘラート）はぶどうの種類は72にも及び、Kandahar（カンダハル）、Saripul（サリプール）、Faryab（ファリャブ）、Chaab（チャーブ）には天水栽培のぶどうがあります。それらのぶどうは山の頂上にあり、誰もそれらのぶどうの世話をすることができないので、人々は１年に一度ぶどうを収穫し、市場で売っています。
ちなみにレーズンはパシュトゥー語とダリ語でKishmosh（キシュミシュ、Kishmishと書くことも）と言います。黒いレーズンは「Kishmosh Qaisary（キシュミシュ　カイザリー）」、赤いレーズンは「Kishmosh Sorkha（キシュミシュ　ソルカ）」、緑のレーズンは「Kishmosh Sayagy（キシュミシュ　サヤジ）」と言います。主に中央アジアでキシュミシュと言うと通じるので使ってみてくださいね。



↑プロジェクト地のミール・バチャ・コット。この地域もぶどうの産地として有名。

「おいしい」の先

無農薬・有機栽培を用いておいしいれーずんが栽培できるようになった背景には、みなさまのご協力によりこれまで続けることのできた11年に及ぶ支援や、アフガニスタンの人と共に行った農業研修（JICAの草の根技術事業協力）などが挙げられますが、このぶどうの本当の実は、アフガニスタンに平和が訪れるときに結ばれるものだと思います。20数年に及ぶ紛争により壊されてしまった生活に、再び平和をもたらすのは、長期的な目をもって取り組まなければなりません。このアフガニスタンぶどう畑再生支援を続けていくことで、アフガニスタンの農家の方々が自立をして生活を続けていけるような持続性のある活動をこれからも行っていきたいと思います。みなさま、これからもどうぞよろしくお願い致します。

（多田茉莉絵）

月イチ★シリーズ 食と国際協力
第１～４回の様子をお届けします

他の国の食を通し、あまりつながりがないと思っていた国々が自分と近く感じる、そのような場をつくることができればと思い始めたこのシリーズでは、月に一度テーマ国の食べ物を食べながら、その国で行ったCODEのプロジェクトを紹介すると共に、皆で語りあう会を設けています。3月から始まったこの会は、6月で四回目を迎え、普段出会うことのないさまざまな方に来ていただける場になっております。

一回目「れーずんの会―れーずんを食べて国際協力」3月28日開催

初めてのれーずんの会では、アフガニスタンをより多くの方に知っていただきたいとい強い思いから、プロジェクトを始めたきっかけやぶどう農家の方々を日本にお招きして有機なぶどうの作り方を学んだ背景、さらには政治情勢の変化に伴い、ぶどう農家の方々が新たな販売経路探さなくてはならない状況に陥っていることをご紹介しました。

会では自然と皆さまの生活に直接につながる消費・販売の話に移り、「商品の作り手の顔が見えた方がいい」や、「生産過程が想像しづらいので、工程の様子をわかりやすく記した方がいい」などのご意見をいただき、有意義な時間になりました。

はじめてアフガニスタン産のれーずんを口にされた方からは、驚きの声があがり、その甘く酸っぱい、同時に噛み応えのある果肉を多いに楽しんでいただけたようでした。

用意した軽食：ココアパウダーレーズンパウンドケーキ／レーズンサラダ／オートミールクッキー





←れーずんの会でアドバイスをくださるみなさま
↑用意した軽食三種の内のひとつ。れーずんパウンドケーキ（ボランティア M.S さん手作り）

二回目「れーずんの会―世界の暮らしから、私たちの日常を考える」4月25日開催

一回目のれーずんの会に引き続き、プロジェクトの内容のその奥にある「なぜ私たちが遠いアフガニスタンの支援を行っているのか」について語る会になりました。当時CODEの事務局長を務めていた村井雅清は、アフガニスタン滞在時に、ふと現地の子どもたちが不安定な状況下で普段と変わらず遊んでいる姿を見、これを守ることがアフガニスタンの平和を守ることだと語りました。ぶどうの畑やぶどうの木をすべて元通りにするのに20～30年はかかると言われるように、アフガニスタンの平和を元の形にする、もしくは新しい平和の形を築くのにかかる時間は20～30年ではきかないのかもしれません。会はアフガニスタンのれーずん一粒一粒の裏に隠されている過酷なものがたりを知る場となり、今後CODEとして、そしてわたしたち個人としていかに寄り添い、共に平和への道を歩んでいくのかが問われているように感じた会でした。

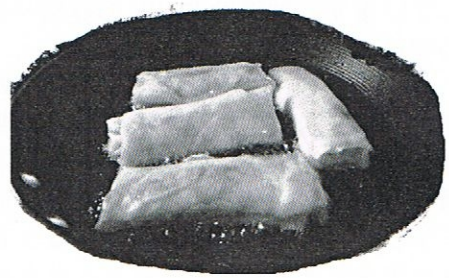


用意した軽食：パラウ／れーずん入りチーズケーキ

←れーずんを入れて作ったチーズケーキ。れーずんがもともとしっとりしているので、相性ばっちりです

三回目「フィリピンからのまなび―トゥロンを食べて国際協力を考える」5月15日開催

PEPUPの中山さんをお招きして行った第三回目は、ドライマンゴーをフィリピンから輸入し販売するPEPUPの活動について語っていただき、また事務局長の吉椿からはCODEのフィリピンでの漁業支援プロジェクトやフィリピンのNGO活動の現状、日本人と関係の深いバナナの話をさせていただきました。会で盛り上がったのは、中山さんの語るドライマンゴーが日本にくるまでの旅やバナナがフィリピンから日本に渡ってくるまでの経緯、その過程でした。資本主義に巻き込まれることを迫られる人たちについて深く考える機会になりました。多くの人々が苦しむ、この貧困のスパイラルを少しでも緩和するために、何かCODEとしてできないかと感じた会でした。



用意した軽食：トゥロン

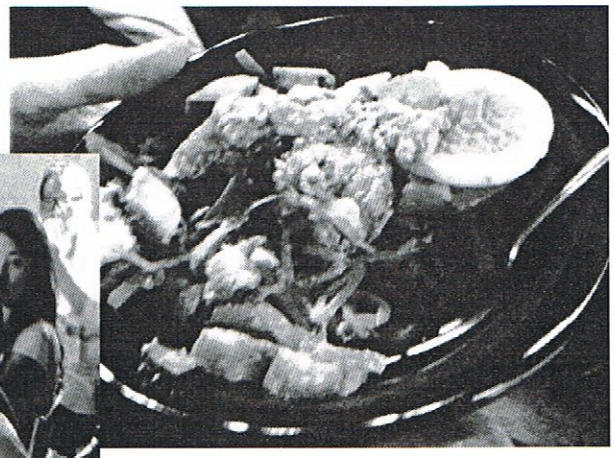
↑春巻きの皮を巻き、一つずつ揚げました。これは揚げているときの様子です。

四回目「インドネシアとつながる―ジャワ・ボルネオの現場から」6月19日開催

JICA兵庫デスクの中村彩乃さんからインドネシアのボルネオ島に滞在された際のお話をお聞きしました。またCODE理事の村井雅清からは、CODEのインドネシアの呼び水プロジェクトについてお話をさせていただきました。

ボルネオ島で果てしなく続くパームヤシの森がさらに拡大することに抵抗をする住民たち、また抵抗をあきらめざるを得なかった住民たちのことやオランウータンが害獣として殺されてしまう状況を中村さんからお話いただきました。村井からはゴトンヨロンというインドネシアに根付く相互扶助の精神から、村の人たちと協力して行ったCODEの呼び水プロジェクトの話がありましたが、このゴトンヨロンの精神をもってインドネシアの問題に取り組むことができないかと考えた会でした。

用意した軽食：ガドガド





←ボルネオ島に関する質問が飛び交った
↑インドネシアのサラダ、ガドガド
中村さんもボルネオ島滞在時によく食べていたそう。そのときの味を再現していただきました

イベント情報

CODE 寺子屋～震災 20 年、国内外の災害復興から学ぶ

1995 年 1 月 17 日の阪神・淡路大震災から 20 年目に入りました。その間、国内では中越地震（'04）、能登半島地震（'07）、東日本大震災（'11）、海外では台湾地震（'99）、イラン・バム地震（'03）、スマトラ地震津波（'04）、パキスタン北東部地震（'05）ハイチ大地震（'10）などの大災害が多発しています。被災地 KOBE の経験や教訓はこの 20 年間何が活かされ、何が活かされてこなかったのでしょうか。

今年度の CODE 寺子屋では、国内外の数多くの被災地を見てきた室﨑益輝氏（CODE 副代表理事）が、阪神・淡路大震災を振り返り、関東大震災（'23）、北但大地震（'25）、函館大火（'34）や唐山地震（'76）、メキシコ地震（'85）、中国・四川大地震（'08）などの世界各地の復興事例をもとに、何が大切なのかを若者に伝えます。研究者、学生、NGO・NPO、ボランティアなどの枠を超えて共に学び合いたいと思います。ふるってご参加ください。

＊＊

日時と内容：全 4 回

第 1 回　7 月 25 日（金）18：30 ～ 20：30　「阪神・淡路大震災からの学び」
第 2 回　8 月 22 日（金）18：30 ～ 20：30　「国内の災害復興からの学び」
第 3 回　9 月 26 日（金）18：30 ～ 20：30　「海外の災害復興からの学び」
第 4 回 10 月 31 日（金）18：30 ～ 20：30　「東日本大震災からの学びとまとめ」

会場：CODE 事務局
講師：室﨑益輝　氏　（CODE 海外災害援助市民センター　副代表理事）
参加費：無料　　＊会終了後、講師を囲んで食事（実費）を行います。
申し込み：事前に CODE までお申込み下さい。

ハイチからの祈り～シスター須藤昭子さん講演と対談～

カリブ海に浮かぶ島国、ハイチは黒人国家として最も早く独立した国です。かつては「カリブ海の真珠」と言われるほど農産物の豊かな国でした。しかし、今では西半球で一番貧しい国になってしまいました。フランスによる植民地、森林伐採、災害、貧困、独裁政権、アメリカによる関税引き下げ、そして農業崩壊。その悪循環に立ち向かった一人の日本人医師がいます。「ハイチのマザーテレサ」と言われるシスター須藤昭子さん（87 歳）は、ハイチに 37 年間滞在し、医療活動だけでなく、住民と共に農業、植林の支援活動を行ってきました。今回、シスター須藤さんに神戸にお越しいただき、シスターとしての生涯やハイチでの暮らしを語っていただきます。また、2010 年のハイチ地震後にシスター須藤さんと実施している農業技術学校建設プロジェクトついても CODE 代表理事の芹田健太郎と対談します。貴重な機会となりますので、是非ご参加ください。

＊＊

日時：2014 年 9 月 23 日（火・祝）14：00 ～ 16：00
場所：あすてっぷ KOBE（高速神戸から 3 分、JR 神戸駅から 5 分）
参加費：2000 円（参加費の一部をハイチの学校の運営資金として使わさせていただきます。）
主催：CODE 海外災害援助市民センター

シスター須藤：1927 年生まれ、クリスト・ロア宣教修道女会シスター、医師。東京女子医科大卒業。1976 年から 37 年間ハイチに滞在し、結核治療に従事する。2006 年ハイチ人と農業と植林を行う NGO を立ち上げる。

芹田健太郎　：1941 年生まれ、神戸大学大学院国際協力研究科長、神戸新聞客員論説委員、総理府（現、内閣府）国際平和協力本部事務局人道救援物資協力問題検討委員会座長等を歴任。2013 年より京都ノートルダム女子大学長。神戸大学名誉教授。CODE 代表理事。

Projects 災害救援プロジェクト近況報告

アフガニスタン地滑り救援プロジェクト

2014年5月2日11:00（日本時間15:00）、アフガニスタン北東部バタフシャン州にて大規模な地滑り災害が発生しました。この地滑りにより503名が死亡、約300棟の家屋が土砂に埋まりました。4月の下旬にはアフガニスタン北部の14州で大雨による洪水被害が発生しており、160名以上の死者を出しました。

連日の雨の影響で近隣の山にも亀裂が入っており、二次災害の恐れがあることから、約1400世帯の住民が安全な場所へ避難しています。



被災地でキッチン道具を使う青年

ぶどうプロジェクトで10年に渡って付き合いのある現地カウンターパート、ルトフ・ラフマンさんは発災後すぐに寄付を集め、避難キャンプでの

生活に必要な鍋、ヤカン、ティーポットなどのキッチン道具の配布を行っています。送られたキッチン道具によって被災者は避難所でも暖かい食事やチャイを飲むことができ、それにより被災者の人たちの心を和らげることができます。

CODEは同5月2日に救援活動を開始し、「アフガニスタンにキッチン道具を贈ろう！」と広く寄付を呼びかけました。皆さまからお預かりしたご寄付はラフマンさんを通じて被災者の方々へのキッチン道具の提供に使われます。さらなる洪水被害も発生しており、まだまだ被災者の状況は厳しいものとなっています。引き続きのご支援よろしくお願いします。　（上野 智彦）

会員・寄付者ご芳名（順不同・敬称略）　2014/4/19 ～ 6/30

月島 彩子／見市 晃／神原 佳予子／小沢 康英／小牧 正子／柚原 里香／水平 企／大江 良一／兵頭 晴喜／楠井 和子／三島 宣彦／田村 快光／松本 誠／鵜飼 愛子／目黒 和子／上柳 幸子／住野 和子／斎藤 茂樹／勝間 洋二郎／コシヤマケンジ／スズキタツロウ
団体・神戸 YMCA ／阪神医療生活協同組合／鈴蘭台食品公害セミナー

正会員
個人・中川 和之／鵜飼 卓／山崎 達枝／明石 和成／松本 誠／飛田 雄一／室﨑 益輝／吉富 志津代／草地 とし子／橋口 文博
NGO/NPO・JIPPO
団体・コープこうべ／神戸 YMCA

賛助会員
杉田 文夫／片岡 幸壱／水平 企／兵頭 晴喜／野本 英晴／阪井 健二／田辺 エツ／目黒 和子／三島 宣彦／江口 節／瀧川 裕康／田村 快光／増田 未知子／加藤 進弘／岡田 雅幸／鵜飼 愛子／讃井 乃梨子／中村 安秀／島田 誠／半田 裕子／菊田 歌雄／下崎 彩／斎藤 茂樹／南 裕子／田中 純一
団体・（有）村井新聞店／神戸 YMCA ／アーユス仏教国際協力ネットワーク

ともにCODEを創りませんか

A4サイズの裏紙の寄付もお願い致します！

■入会のお誘い

私たちと共にCODEの活動を担っていく会員を募集しています。

【賛助会員】

個人・学生 ：年会費2,000円×1口以上
NPO/NGO ：年会費2,000円×1口以上
企業・団体 ：年会費10,000円×1口以上
ほか、正会員、登録会員ご希望の場合は事務所まで

■ご寄付のお願い

CODEの活動を継続するために皆様からのご寄付を募っています。救援プロジェクトへのご寄付は15%を上限としてCODEの管理運営費に使わせて頂いております。ご協力お願い致します。

郵便振替　加入者名：CODE
口座番号：00930-0-330579
銀行振込　ゆうちょ銀行
支店名:〇九九店（ゼロキュウキュウ）
支店番号：099　預金種類：当座
口座番号：0330579
加入者名：CODE

事務所での作業や翻訳ボランティア、自宅でも作業可能なボランティアなども募集中です。

役員・スタッフ活動記録 2013/4/20 ～ 2014/6/30

4月23日　北陸学院大学ボランティアワーク打ち合わせ（吉椿）
4月24日　神戸学院大学現代社会学部で講義「東日本大震災とボランティア」（頼政）
4月25日　第2回れーずんの会（レーズンを食べて国際協力） 開催
5月　1日　神戸学院大学現代社会学部で講義
「CODE海外災害援助市民センターが担う社会貢献について」（吉椿）
JPFのOCHA「東日本大震災と国際人道支援研究会」ミーティングに同行（頼政、多田）
5月　3日、4日　高槻ジャズストリート2014でレーズン販売（福岡）
5月　4日、5日　アースデイ神戸2014でレーズン販売（頼政、多田）
5月　8日　神戸学院大学現代社会学部で講義「アフガニスタンと開発援助」（村井理事）
5月10日　CODE若者寺子屋第2回（村井理事）
5月15日　神戸学院大学現代社会学部で講義「フィリピンの復興から学ぶ」（吉椿）
NGO-JICA協議会コーディネーター会議（村井理事）
第3回「食と国際協力」（フィリピン）（吉椿）
5月19日　NGO-JICA協議会コーディネーター会議（村井理事）
5月22日　神戸学院大学現代社会学部で講義「災害復興から持続可能な開発プロジェクト」（浅野先生）
5月24日　関西NGO協議会総会にてれーずんの広報・販売（多田）
5月27日　シスター須藤と打ち合わせ（吉椿）
5月27日～30日　NGO国境なき災害支援隊図書館プロジェクトのアテンド（上野）
5月29日　神戸学院大学現代社会学部で講義「四川大地震とCODEプロジェクト」（吉椿）
5月30日　地域コープ委員会学習会で講義（吉椿）
5月31日　神戸学院大社会貢献学入門で講義（吉椿）
6月　1日　灘チャレンジにてれーずんの販売（頼政、増島、多田）
6月　2日　JICAと防災関係団体の懇親会（吉椿、上野）
6月　5日　神戸学院大学現代社会学部で講義「地方分権と被災者主体、市民主体とは？」（松本理事）
兵庫県産業労働部 藤井さんにれーずんの報告　（多田）
6月11日　コープこうべ第94期通常総代会に出席（吉椿）
6月12日　神戸学院大学現代社会学部で講義「農といのちを考える」（本野一郎さん）
NGO-JICA協議会コーディネーター会議（村井理事）
6月14日　CODE理事会、総会、CODEの夕べ
6月16日　CODE寺子屋 打ち合わせ（室﨑、吉椿）
6月19日　第4回「食と国際協力」（インドネシア）（村井理事）
神戸学院大学現代社会学部で講義「災害時における地域力」（織田峰彦さん）
6月21日　JICA PARTNER「国際協力人材セミナーin関西」で講演（吉椿）
CODE寺子屋第3回　（村井理事）
6月24日　関西NGO協議会提言専門委員会（村井理事）
6月25日　第1回NGO・JICA協議会（村井理事）
6月26日　神戸学院大学現代社会学部で講義「災害復興と行政の役割」（斎藤富雄さん）